



# 私の組の研究

加藤 邦子

## 現場の研究

### はじめに

もしもこの研究が「研究しよう」との意図から出発したとすれば、ここでもなされる報告はもっと異なったものとなったであろう。

この研究は、最初から一つの主題のもとに計画的に整えられ、着手されたものではなかった。新しく入園してきた幼児たちを受け持ち、毎日の保育を精一杯に展開させていきながら、「どうも困った」と保育者が首を傾け、「何とかしてもっといきいきした明るい子どもたちの群にしたい」とくふうをつみ重ねていったものである。報告文にもみられるように一定の対策をたてたのは自分の組の問題を「是非とも何とか解決したい」と保育者が決心をした5月上旬に入ってからである。しかし、保育日誌をこまかくつける習慣が、それ以前の経過をも一貫して報告することを可能にしている。そしてそのために、問題のありかたをつきとめることも、対策をたて、それを試みることも容易であった。

結局、この研究は、保育の中で当面した問題を、毎月の保育の中で解決しようとくふうを続けていきそれを更によりよく改善するために残していったいいねいな記録をまとめたものにすぎない。しかしこのいき方が、保育の現場でなされる現場の研究の典型ではないかと思ひ、誌上に報告する価値を見出したわけである。

(尚綱短期大学・本田和子)

## 一、問 題

私の組は一年保育の五才児で、男児十一名女児八名から成る。園の構成は、二年保育の五才児一組、四才児一組と、この組から成り立っている。この組の幼児たちは、二年保育の四才児と共に、今年の四月に入園したばかりであるが、四才児と比してのびのびとした点が欠けており、概念的な思考や行動はするが、自発的、創造的なものに欠けている。また級内での活動はよいが、全体活動で甚しく委縮し、自信がなく子どもらしく天真らん漫に活動することが少ない。

### 具 体 的 な 例

1 自由遊びにおいて、積極性に欠ける。あまり遊びたがらず、ほとんどもが傍観、あるいは着席したまま、あるいは単独で、ぼんやりと、意味のない動きをする。

2 礼拝の時（全体集合の場合）非常に緊張聖句などはおらずと  
言い、歌声も小さい。

リズム遊びやお遊戯をすると失敗を極度に恐れる。いすとり、かけっこなど、勝敗のはっきり見えるゲームを嫌う。

3 自由画を描かせると非常に概念的な絵が多く、描くことをあまり喜ばない。

他の人の出来ばえを気にして、先生にこれでよいかと幾度も聞く。見にくくと、へただからといって手でかくす。

## 二、原因と考えられるもの

### 1 発 達 的 原 因

五才児なので知能はすすんでいるが、今まで集団生活をしていないので非社会的であり、既成概念の理解や思考の面が進んでいる割合に、身体活動とのバランスがとれない。このことから自己の未熟さを自覚し緊張している。

### 2 組 織 的 原 因

二年保育年長児と年が同じであることを知っており、また二年保育年少児よりも年上であることを知っているので、前記の原因から来る緊張感が、この全体の場で行動する時に、意識されており、スムーズに出来ない時に劣等感として表れる。

### 3 家 庭 的 原 因

家庭では「来年学校にあがるんだから」といって幼稚園を学校の予備校のように考えていたかたも少なくなかった。幼児たちはお勉強しようということばを始めのうちよく使った。

また、入園に際し、きちんとするように言いきかされてきて、幼稚園にいったらお行儀をよくして、先生の言うことをよく聞かなければならないと思い、自由に遊ぶということをあまり念頭においていない。

また、家族の中に、子どもをおとなの標準でよくしようと思ふあまり、評価がきびしく否定的なしつけを続けてきたかたがあり、その子どもは結果や人の思惑を気にして人前では何もしない子になっていた。

また、両親共かせぎの為、老祖父母の手によって養育されあまり外に出て遊ばなかった子もあり、今までひとりっ子だったのに、ちょうど入園期に赤ちゃんが生まれて、そのためか何となく物足りなそうな子どももある。また、転勤で土地やことばになれず、近所に友だちがない場合もあった。この組には双生児が一組おり、二人共内攻的な性格であるが、ひとりはより強く内攻的であるので、もひとりに対して依存しておりながら、また、劣等感を持っている。しかし兩人とも互いに同一視することが多いのであまりはっきりとは意識していないようであるが、比較されるような場面で、級友に名前をまちがえられた時など異常な緊張を示す。

以上、ひとりずつとりあげれば、各々種々の原因がからみあっているが、このように委縮的内攻的な性格傾向をもつ幼児が約二十名中十二名程であり、その上、1、2、などの理由により、クラス全体が一般的に、委縮した雰囲気になっていたと思われる。

### 三、目 的

組全体として、委縮した雰囲気と劣等感から解き放ち、のびのびと園生活を楽しめるようにし、同時に五才児としての自信と自覚をもたせたい。

### 四、対 策

#### 1 全体に対して

##### ④ 創造性を伸ばし自立心を養う為に

また、人との比較を少なくして劣等感が起らないようにする為に、形による比較の困難な、そして思う通り自由に表現することの容易な活動を多くする。(コラージュ、積み木、モビール、粘土、もぎいく模様(画用紙で) カラーサンド(色付け砂) フィンガーペンティング

##### ⑤ 音楽リズムの面において

擬声音のとり入れてあるもの、また調子のおもしろリズム、あるいは歌詞がおもしろく朗らかなものをえらんだ。いろいろな模倣表現のあそびや、自由表現を多くさせる。

#### 2 特定の個人に対して

##### ④ A男、B男、

内攻的性格をもつ双生児であるが、B男は少々明るい感じと比較的開放的であるので、私のそばからはなし、明るい感じのグループに入れる。A男はほとんど何も話さない暗い感

じの子なので、私の最も近くに席をとり、最も仲のよい女兒C子と並ばせる。C子は他の原因から気弱な性格になっているが、なれた人に対しては明るい女兒である。A男と性格的に共通点もみられ、仲もよいので、特に内攻的なA男が劣等感をもったり、今以上に内攻的にならないよう配慮したつもりであった。

⑧ D男

非常に気が小さく恥ずかしがりやであるが大勢の中に入つて、気がむけば大声を出して騒ぐ。双生児のB男と並ばせる。

⑨ E子

内攻的で非社会的である。入園時に母よりはなれずてこずったが、その後先生に依存し、はなれなくなった。しっかりしてやさしく世話好きな女兒F子のそばに坐席をきめる。

この他にもっと挙げる事が出来るが大なり小なり問題のある子どもを特に意識して、自由遊びの時には身近に接近して遊ぶようにする。

五、経過 (四月より九月まで)

1 四月中旬頃の状態

D男、E子、C子、A男、G男など四、五人の幼児は中旬になつても、まだ母のそばをはなれず、園まで送りむかえはもちろんのこと、中には一日中、玄関で待っていなければ泣く子も

あった。お母さんたちに了解を得て、毎日今日は保育室の外、次はお庭、次は玄関、そして帰り途の途中までというように距離を遠くし、一方そのような子と私が手をつないだり、泣く時は抱いたりして近くにおいた。

他の子たちは自由遊びの時も一こう室外に出ず、ただ不安そうに席からはなれないでいる。

2 四月下旬

前記の子どもたちは母のそばからはなれるようになったが、先生や、一定の友人のそばから離れず、ちよつと顔がみえないと泣き出す。その他の子はほとんど自分から遊ぼうとせず、自由遊びの時も室内に坐っており、あるいは少数の者が立つてぼんやりと他のクラスの子が遊ぶのをみているだけであった。

3 五月上旬

遠足について予告したので期待をもち、級内で話し合いが活気ついた。しかし、自由遊びの時は女兒男児ともに二、三人だけがジャングル・ジムや砂場で各々二人単位ぐらいの小グループで遊ぶ程度で、他の $\frac{2}{3}$ ほどの幼児たちはテラスや廊下に腰かけたり、立ったりしながら傍観している。

私が汽車ごっこ、かごめなどの遊びにさそうとそのうちの約半数は出てきて遊ぶがあとの半数は、笑いながらしりごみをし

て入らない。

この頃全体のリズム遊びの時わくぐりのリレーをした。他のクラスの子たちは年少組には一、二人拒否する子もいたが一般には騒ぎ興じながら熱心にその活動に参加していた。しかし私のクラスの子どもはほとんどが非常に緊張し、女兒二人（C子E子）男児三人（A男、D男、G男）がこのゲームに出ることを拒否した。また別の日に、ひとりずつスキップをする場面で前記の男女児五名が、先生と一しよにしましょうといっても立たなかった。またその誘いでやっと立ち上ったのが他に五、六名程であった。

この頃自由画をかかせる、描くことを嫌うものが多く、ほとんどがかいても線がきであった。

#### 4 五月 中旬

待望の遠足の日、到着の後集団遊びなどをしたが、約九人ばかりの幼児はほとんど父兄の側からはなれず参加しなかった。しかし、これは疲れの故もあるかもしれない。この週遠足の思い出の話し合いが楽しくおこなわれた。私は非常に活発になったクラスの雰囲気期待をもちながら、思い出の絵をかくよう暗示を与えると、「僕はかけない」とひとりが言い、二、三人がそれをまねた。どうしてとわけをたずねると、「下手だもの」といった。この日はやめて、一、二日してから遠足のリス

ムあそびなどした後何も言わず描きたい人は何でも好きなものかいてごらんといって、紙を机の上に重ねておいた。ほとんどの子は周囲の様子をうかがったりして席をたなかつたが、B男がすっと立って恥ずかしそうにしながら紙をとり来るとB男が「かみ」と言いながら手を出して取りに来た。すると皆が次々に紙をもってゆきほとんど $\frac{2}{3}$ くらいの子が遠足に関する絵をかいた。しかし概念的なものが多く、チューリップとお人形みたいな女の子とおひさまが圧倒的であった。また画用紙の隅の方とか一部分に小さくまとめてかいてあり色数も少なかった。何か自信のない感じを全体から受けるものが多かった。

#### 5 五月 下旬

この頃から課題画をやめて、自由に思う通りの活動を多くしようと思ひ前記の対策をたてる。返事の低い子（A男、C子）があつたので、皆で動物の鳴声をまねて思い切り大声を出してみた。鳴声で返事をさせると喜んで大きな声を出したがかえって出来なくなった子もあり、二人でさせると大きな声を出した。三、四日後ゼスチュアを加えてみると各々喜んで部屋の中をはったり、はねたりして騒然となる程であった。翌日、四、五人のグループごとに好きなゼスチュアをさせる。各々のグループに積極的な幼児がひとりか二人ずつ入っているのだからリードすると喜んでまねをした。この頃から型にはまったお遊戯

## 6 六月上旬

をやめて、専ら自由表現によるリズム遊びを多くした。また、則武昭彦氏によるおそうじの歌は幼児たちに非常に喜ばれた。

“ほうきがしゅっ、しゅっ、しゅっ、  
はたきがぱっ、ぱっ、ぱっ、  
ぞーきんすーるする……  
ちりとりえっさっさ、  
如露がかんからかん  
お水がチャッ、チャッ、チャ……”

内容的に体験を通して知っているものであり、擬声音がおもしろく入っているので興味を感じたものと思われる。

この時期に、お玉じゃくしの製作をちぎり紙でしてみた。紙を破っていると思うように形にならなかったがちぎってはるという指先の快感に興味をもったのか、珍しがりおもしろがっては紙を破いた。前記の目的でコラージュをしたかと思っただがどのように動機づけたらよいものか思案していたところだったので、この傾向を展開するように考えてみた。翌日、シールはりの時に皆でテラスに出て、お天気のことなどの話の中に雲の形や大きさや、何にみえるか、どんなのが好きとかを話し合い、そのあとで好きな色紙を与えて好きなようにちぎらせた。好まれた色は圧倒的に紫と茶であり、水色、ピンク、赤、みどり

## 7 六月中旬

などの順であった。これはあとでカラー・サンドを使用した時ほとんどこの順序であった。色紙をただちぎらせるのが非常にもったいないと思ったが、思いなおして、お道具箱（当園では普通の菓子函のようなボール箱を使用）をもってこさせ、思う存分ちぎったあと、こまこまとなったものを私の所の大ボール箱に集めた。各自の箱から大きな箱にあげる時、いろいろの紙がチラチラ散るのでひとりが箱から掴み出して、キャッ、キャッと騒ぎながら、走ったりとんだりした。私はとめようと思ったが、こんなに楽しげに騒然としたのはほとんど珍らしいので、私も一しよになって、紙屑をかぶり「きれいねえ、すてきねえ」などと言いながら子どもにかけたりかけられたりして室中をとびまわって遊んだ。このあと、おそうじの歌をうたいながら、全く大ざっぱではあるが室の中をかたづける。この日は子どもたちは生きいきし、満ち足りたように元気であった。

天候はからつゆで曇りの日が多く、湿度が高く気温が低かったのではほとんど室内遊びが主であった。前週に続いてちぎり紙をしたが、これを八つ切画用紙の1/4大のものにはらせてみる。A男、B男共に非常に集中してこれをおこない、色彩的にも構成的にも美しいものが出来た。A男は色彩的には強烈でありちぎりかたが柔かく、時間的にも、始めから終りまで口もきかず

頬を紅潮させてほとんど画面より目をはなさなかった。全体的に印象的に強烈であった。B男は色は柔かなものであり形が大きく、隣の子(D男)と笑ったりみくらべたりしながら早く終ってしまった。あとで各自のものを展覧会こつこつとして陳列し、電車ごっこをしながらみくにくあそびをする。私は絵描きの大先生になり、一つずつ全部のものをほめて歩くと、一人ひとり非常に喜び、このあとカラージュが自由遊びの時要求されるようになった。この活動では一人ひとりが皆異った特徴が出て、人の模倣は不可能であり、一見して優劣がつかない為か、今まで絵をかくのを嫌がっていた男児二名は喜んでカラージュをするようになった。この週は室内遊びの際積木が盛んであった。そこで色紙をはさみで三角や四角にきり積木を作ってみたりしたあと、クレヨンで画用紙にいろいろな形、色の積木を描いた。現実にはあまり重ねると落ちてくるが紙の上では自由なのでいろいろとおもしろい幼稚園や魔法のはしごや魔法の城など、幼児たちは想像のままに三角や四角で重ねたり区切ったりして遊んだ。しかし線になれないので、模倣的になりがちで、四角よりも三角が圧倒的に多かった。その三角も直線というよりも曲線的であり角がかけたりしていたが、これもだんだん線がしっかりかけるようになった。また三角や四角の組合った部分に他の色をぬることを始め、それが極めて調和的な色彩を用いるようになった。ある子は色を次々ぬることを楽しんで、多くの色

を次々ときれいに並べた。

またある者は、三角や四角の中に更に線で区切ったり二つの形を重ねたりすることに興味をもち、画面をあちこちみわたしながら線で構成を楽しんだ。歌を口ずさむ者、飛行機の音、自動車の音などをまねする子、いずれも30分の所定時間を十分に使い、紙面がまだ半分かりのこっていたので、翌日またするように話して、自由遊びをさせると、一度しまいこんだものをまた持ち出して来て始めた。

これ以後、自由遊びの時間に多くの幼児が、自由画帳にこの種のものを描くようになった。写真は前述のA男(写真(2)下)

(1)



(2)

A ↓

↑ B



B男(写真①上)の作品である。

この週、体力しらべをした。しかしC子だけが顔色をかえて拒否した。競争で人に勝てないということを非常に気にしてほとんども恐怖的になっているように思われた。この女兒は、家庭の中で、しつけについての対立があり、一方がおとなの標準で子どもの行動を評価し、否定的なしつけをするので、結果を気にして、物事をするのを嫌がる傾向がついてしまっていた。しづは家庭と連絡をとり、いろいろ話し合ったりしたが表面上は納得したかのようにみえて未だ家族間の折合いがつかず、根本的な原因は、家族間の不和が教育法の問題に発展しているの、なかなか解決がつかない。

## 8 六月下旬

七月の七夕まつりゆうぎ会の為に劇遊びを計画する。紙芝居のどんどこ太鼓が大好きだったので相談の結果その劇をするのとなり、希望者を募った。なるべく、自信のなさそうな子を選び出して、各々反覆して同じせりふと動作をするような役をさせる。主役はリズム感のしっかりした積極的な女兒を配して、この子の動きによってリードされるようにした。

また、別に、歌と動きだけで表現するリズム劇天の河を計画した。この主役には、内攻的なA男、B男、E子をして一か月おくらせて入園し、病気のため六月まで休んでいた子で孤独的な

## 9

### 七月月上旬

性格のH子を組ませ、二人ずつ、織姫と彦星にした。また動作の鈍い比較的ぼんやりした感じの男児を二人ずつ組にして各々彦星につくスワンにした。このリズム劇は簡単なので皆らくにやっつてのけ、満足していたようであった。この他に残った人たちがどうしても劇をしたいというので相談すると一寸法師がしたいということになった。これも脇役には割合しつかりした子を配し、主役には気が小さい、しかしちょっとがんばれば出来そうな仲よし二人をえらんでみた。これから毎日時間さえあれば、劇をしよう劇をしようと言って迫るようになった。

この頃折り紙をこちらから教えて折らせると「つまらない」と言い出したので、あらかじめ作るものをいって置いて最後の一つ前まで折ってからかくふうさせるようにすると、いろいろ考えながら勝手におもしろがっては自分だけ納得のいく目的物を作った。しかし説明をきくとなるほどと思うようなものもあった。がやはり折り紙はなかなかむずかしく相当の指導を要するようであった。

この頃指絵をさせてみたいと思ったが、材料が揃わなかったので、指先の抵抗の違ったもので自由にかきまわしたりできるようなもの、と考えて、砂を色付けしたものを七色作ってみた。園庭の砂を土ふるいでふるって同じつぶの大きさのこまか



い小石を集め、ボスターカラー粉絵具とメリケン粉各々同量を熱湯でこねたものをかけてまぜ合せ着色し、板の上に新聞紙をしてその上で乾かした。はじめの日、室を机で六つに区切り床に新聞紙を大きくはり合せたものを用意し、各色ごとに配置し、好きな色の所に、二、三人ぐらいつつにわけて遊ばせた。遊び方は別に何もいかなかった。はじめは珍しそうに指でさわったり、お山を作ったりしていたが、そのうちに池を作って、お玉じゃくしだといって砂を一粒落したり、指で線をかいて、「ボーッ」と声を出しながら手のひらを横にして汽車のまねなどをして遊んだ。この時各々の色を選んだ順はやはり、この間の色紙の場合とほとんど一致していた。

紫—A男、C子、K子（内攻的）

茶—B男、D男（やや明るい）

緑—S男、M男、Q男（非常に明るい子たちで活動的である）

赤—H子、R子、A子（明るいが各々個性的で性格が強い）

橙—Z子、R男（非常に落ちつきがなく騒がしい子）

黄—石の色が出て濁った色になったので与えなかった。

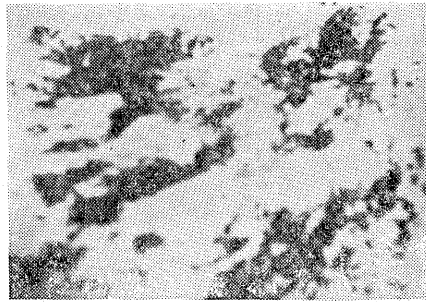
青—J男、L子、E子（三人とも、口数の少ない内攻的な性格、しかし、しっかりしたところがある）

このような子どもたちの性格と色についての好みがどのような関係にあるのか、まだよくわからないが、ほとんど同じような傾向の性格の子がいつも似たような色を選ぶことは非常に興味ぶ

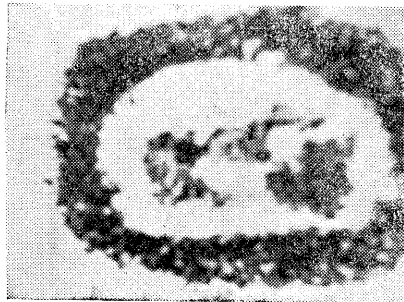
かく感じさせられた。この外に、その日休んでいたO男はいつも水色が好きであったが、彼は品の良い貴公子のような感じの神経質で、知能の高い子どもである。去年のクラスにも同じような子がいて、彼もまた水色が好きであった。さて、このあと、一度同様に遊んでから、次には各色ごとに口の広いびんにつめて、グルーブごとにわけて与えた。画用紙を渡し、のりを使用させ、好きな色を好きなようにつけてごらんとすると、手のひら一杯にのりをつけて紙面をなでまわし室中騒然とした。そのあと、手を洗ってから砂をざらざらと紙の上に落し始めた。山になるほど各色の砂を落し、こすったり指で線をかけたり、また、かきまわしたりしながら声を立て机のまわりをかけるまわるありさまであった。驚喜ともいえるほどの熱中ぶりである。お片付けをさせないわけにもいかないで、ものすごくちらばった室をほうきではくのはとてもたいへんであった。このあと、かわいてから表面の砂が自然に落ちるにまかせて最後に残ったのを見ると、一番始めに使った色の順序や、手のうごきのあとなどが出てきて興味深かった。ほとんどが真ん中はこまかく、周囲になるにしたがって手のうごきが大きく大胆であるように見られた。元気のいい子のはやはり散々こねまわしたあとがあり、性格の弱い子はバラバラと砂が四散していてあまりいじったあとがなく、内攻的な子は、画用紙のあちこちをちょこちょこいじってみたらしく所々に砂がかたまっけて置いてあると

いった具合である。色も各々に特徴があり最初のもが多く残っていた。

写真3は元気のいい子でダイナミックにいじりまわしたあとであり、写真4はおとなしくお池にお玉じゃくしと蛙を作ったものである。



(3)



(4)

## 10 七 月 中 旬

七夕遊戯会が催され、予定した三つの劇が各々精一杯の緊張の中におこなわれた。年少組の先生が病気で休まれたので前の週から年少組と一しよに天の川のリズム劇をやり、人数がふえまた、年少組と一しよの故もあって安心感があつたらしく、年

少児をリードしながらおこなっていた。

どこそこ太鼓では三人の反覆する動物の役が効を奏したのか、全く同じ動作とことばがくり返されるので、自信のない依存性の強いこの子たちは赤くなりながらも大きな声でやり通すことが出来、この後、非常に自信がついたように思われる。

一寸法師の主役になった子は、あまりめだたない落着きのないあわてもので、その割に神経質な子であったが、主役という責任の故か非常にしつかりして予期以上の効果を上げることが出来た。そして劇の効果以上に、この子は自信が出来、注意してものを聞き、大きな声で立派に話したり、ひとりで歌うことが出来るようになった。お姫様になったC子は例の家庭的な問題をもっている子であったが、ことばも動作も興味をもって自分から熱心におこなった。ただ、声がいつも低かったため、当日もそうであり、帰宅後そのことで失敗をきめつけられたという報告が家庭よりあった。しかし翌日彼女にあってみると、自分では自分の声がきこえたから立派にやったと自信をもっており、また当日私が、声は低いにしてもあれだけ積極的且つ熱心に行なったことに対して絶讃を表したため、喜びと自信にあふれており、祖父の叱責に対しては意に介さずむしろ反抗的な態度を示した。私は早速家庭訪問をし、彼女がいかに進歩したかを話し、相対的評価よりも個人的な進歩成長の過程をみつめて、評価をして下さるように話し了解していただいた。一方、園では

彼女に対して、おとなはあなたがいい子になるように心配してくれるのだからとしよりを悲しめないようにいいかせた。五才児なので、手を握りながらしんみりと話す私の目から目をそらしながらも、考え考え、うなずいていた。しかし、この子の意識の底には小さい時からの親と老人の対立感情がしみこんでいるのか、こんなことをいった。「わかったわ、でも本当はおばあちゃん大きらい」「なぜ?」「お母ちゃんいじめるからよ」そして更に「先生はおばあちゃん好き?」ときくので少々当惑したが、大きくうなずきながら「ええ好きよ、だってね、本当はいいかただもの、先生はよくわかるの、Cちゃんはまだ子どもだから、よくわからないかもしれないけど……」と答えた。彼女は、まじまじと私をみつめながら「そーお」とじっと考えこんでいた。私はこの時、ふと、自分はこのおばあちゃんを果して善意と十分な愛情を持って考えて来たのだろうか、と反省させられた。例え解決へのほど遠い一步にしかすぎなくとも、満身の愛情と善意が、一人ひとりの幼児と、その家族に注がれるべきだと、ひしひしと感じさせられた。

七夕遊戯会が終ってから、それまで緊張していたので少し自由遊びの時間を多くし、暑い日が続いた為、下着一枚になつて、足洗い場で水あそびさせる。

服をぬいだ解放感と水の涼気とをよろこび、この頃、水鉄砲、おせんたく、おふろなどの歌やあそびがおこなわれた。ク

ラス全体としてのびのびと解放的な雰囲気となり緊張感がなくなり、創造的な活動が多くなってきた。しかしまだ、二年保育年長児のように、五、六人のグループ遊びはなく、グループはあつても、二、三人ぐらいで持続時間も、五分とは続かなかつた。この頃の自由遊びの状態と、五月下旬の概況と比較してみると次のようである。(行動が変わるので合計は延数人)

五 月 下 旬		七 月 下 旬	
傍観——五人	二人	四人	
本よみ——五人	二人(隣の組の子と)	三人	
おしあい——なし	三人	一人	
走る(目的無)——五人	三人	三人	
砂場(単独)——三人	一人	三人	
ブランコ——一人	四人他に単独行動一人	二人(集団)	
たいこばし(単独)	二人	二人	
鉄棒(なし)	二人	二人	
ジャングル——二人			
ボールなげ(集団)			
(五月下旬なし)			

このあと夏期休暇に入り、九月に入ってからしばらく元気がなかったが敬老会のため簡単な全員出演の劇を計画。皆、一言ずつせりふを言う役があり、この頃劇という目色を変えてとび上つてよろこぶようになった。

夏休み後、水彩を与えたが、あまり興味を示さず、また、太陽

と家と女の子とチューリップをほとんどがかいた。多くのものは傍観。(自由遊びの時、場を設定して自由においたので)しかし、老人への贈物の菓子入れの袋を製作し、絵をかくて、という、多くのものはクレヨンで三角四角のシュールレアリズム張りの模様をかいた。やはりクレヨンの積木らしく、このことを「クレヨン」の「積木」としてイメージに残っているらしく絵筆や水彩絵具を与えると依然としてチューリップである。

### 九月中旬まで

敬老会の行事が中心となって保育の中にとり入れられたが、この頃、情緒的なものを好むようになり、則武氏の赤いお馬車という歌を好む。歌詞は牧歌のように夢がありメロディも楽しい感じのものであった。また同氏の十五夜おもちつきのお馬車を劇の中にとり入れたので、自由表現を試みたところ、次々と考え出し、ついに、劇中の四つの歌に各々自分たちで振付けた動きのリズムが出来るようになった。この頃、歌を教えると大きな声で元気に歌い、特にスタッカットのあるものをよろこぶ。また、シンコペーションになっているような珍しい感じのする曲を手で休止符を教えたりして歌うのを好むようになった。また情緒的な短調の歌なども気分を出して歌うようになった。

お月見の劇(敬老会でする劇)の中で兎がおもちをつくところがあり、これをする女兒が、庭からクローバーをとって来て、

うざちゃんにクローバーのおもち作ってあげましようと言いな  
がら、自由遊びの時、小皿の上でつぶし始め、兎になった五、六  
人の女兒を中心としてまご遊びが始まった。入園当時、ま  
まごのためにまごと道具を用意して頂いたのだが、余り使わ  
れず、そのままになっていたのを探したが見当らず、仕方がな  
く、教壇を平らに二つしいて二帖ほどの板の間を作り、空きび  
ん、のりの大きな空かん、汽車に乗った時持ち帰ったお茶のび  
んとふた、麦茶のコップ、牛乳のふた、生けてあった小菊など  
を少々かごにいれて、「プレゼントいたしますわ」などとおど  
けてもってゆくと、きゅーつととび上ってよろこぶ。机といす  
を自由にしてよいと許可を与えると、お風呂、玄関、台所など  
が出来、ほうきとごみ箱がおかれ、お風呂屋さんが開業され、  
ぶたやさんがまわって来る。男児で靴泥棒になる者もあって苦  
笑させられる。また、ごむまりをスカートのの中に入れたお母さ  
ん気取りの女兒が「もうすぐ生まれるんですよ」などと言  
うと、もうひとりの男児がまりを二つ上着の下に入れて、「ふた子  
なんですよ」などといって、私をあ然とさせる。そばで双生児  
の子が恥ずかしそうに笑いながら二人でおしあいをしている。  
先の女兒は八百屋さんの子でいつも庭先で遊んでいて、近所  
のお母さんのまねをしたらしい。もうひとりの男児は、双生児の  
家の近くにすんでいる無邪気で活動的な子で、八百屋さんの子  
と気が合うのでこんな会話になったと思われる。私はお客様に

されたり、お風呂に入れられたりする。この日より三日、毎日ままごと遊びがつづく。(写真5)くたびれた人が二、三名、笑いながら時々みているが、ほとんど例外なく、子どもになったり、各々の役で遊んでいる。リーダーになっているのは鬼の主役をしたI子という女兒とC子である。I子は、クラス中で最も体格もよく、知能も優れており発表力もあり素直でしっかりしており皆から好かれている。C子は、お母さんになって命令したり、お姉さんになってお母さんに協力したり、口数は少ないが、まないたの所からはなれずに仕事をしながら、一家(?)をきりまわしている。彼女のどこにこんな点がひそんでいたのだろうか。

九月もなかばの声をきく今日この頃、入園時とはうつてかわつて、静かにといくら言いきかせても、旺盛な活動力とはどまるところを知らず次

(5)



↑C子

↑I子

↑E子

々と遊びを生み出し、会話を生み出し、自由遊びの時間はいくらあっても足りないようである。まるでぶどうの房が色づいて甘い匂いをはなつように、今、このクラスには、楽しい豊かな味わいのする雰囲気のみなぎって、子どもと私、子どもと子どもとの間に有機的なつながりが生まれてきたように思われる。

## 六、まとめ (第一保育期をかえりみて)

現在、当初の目的を顧みて、ほとんどその目的が達せられてきたように思われる。しかし、今までの歩みを、特に、対策とその経過を顧みる時、全く暗中模索であり、一つひとつの試みたことが、どんな効果を生み出したか、甚だ曖昧なものである。それ以上に、この幼児たちの内に秘められた成長力が、極めて不確かな刺激の仕方にかかわらず、溢れ出たという感を強くする。しかし、まだ今後に残された問題が次の段階として山積しており、一人ひとりをみつめて、新しい目標と対策を樹てなければならぬ。その意味で甚だ潜越ではあるけれど、あえて今までの試案の効果と思われるものをまとめてみる。

### 1 (4) 形による比較の困難な活動

コラージュ、カラーサンド、クレヨン、積木、など比較がしにくいので劣等感が起らず、模倣が出来ないので創造性が養われ、珍しいので興味をもち、色彩感、構成能力、活動力がついたと思われる。しかし、今のところマンネリズムにおちいりそ

うな感があり、この後の対策を考えねばならない。

(四) 音楽リズム面において

擬声音、模倣表現は（特に動物の動きの表現）生活に親しみがあがり、緊張感を柔げる役目を果し、更に模倣より簡単な兎や狐、狸のお遊戯と、創作出来るような動機づけとなったように思われる。

(五) 劇あそび

力量相当の役に責任を果すことによって、劣等感がなくなり自信をもつようになった。特に、総出演でひとり一言の劇は、満足感と共に成功感と自信を与えたように思われる。

2

(六) A男、C子、隣り合った席で毎日決してはなれず、また、

A男は私と常に一定の間隔を保って遊んでいる。安定感をもったようであり、これにはB男が同じ組にすることが大いに関係していると思われる。なおこの二人の父母は仕事の為、五月中旬より、この子たちと別居しているが、二人はおばあさんと共に暮し、元気に異常なく登園して園生活を楽しんでいる。

(七) D男、B男、共に活発になりお調子にのって騒ぐようになった。共通点があるので気が合い、元気になったのはよいが、少々反社会的行動（D男）がみえてきたので今度はまた別に席の配置を考えている。

(八) E子、まだ非社会的ではあるが、とても朗らかになりひとり

で自立することが出来るようになった。しかし、気のむかない時や、あまり目立つ時はひとりで要求された行動をすることが出来ず頑固に拒否する。隣席のしつかりして世話好きなやさしいF子が大好きでありこの人を通して多くの友人と近づき安定した友好関係をもっている。しかし、ある特定の活発すぎる男児を極端に嫌っている。

こうして一人ひとり考えてみると、その性格にはそれだけの原因が組合されて備えられていることに気付く。一年保育児が一クラス編成されたのは今年がはじめてであるが、その特徴ある欠点と長所が、ここ半年の間にいくらか、かいまみることが出来たように思われる。地域社会の経済事情、幼児教育への理解などの諸問題から、まだまだ一年保育の占める役割は大きい、この限られた短い時に最大の関心を払って、良き生涯の礎をすえる一端の任を果すことが出来たらと願いつつ、拙稿を閉じることとする。

なれ、この研究をすすめるにあたっては、尚綱短大保育科の先生がた、および尚綱幼稚園の諸先生に、御指導、御協力を頂いたことを付記して感謝の意を表します。

（尚綱女学院幼稚園）